

富津市鳥井戸遺跡

—— 富津都市計画道路事業3・3・3号二間塚大堀線埋蔵文化財調査報告書 ——

平成13年3月

千葉県君津都市計画事務所
財団法人 千葉県文化財センター

ふつ つ し とり い ど い せき

富津市鳥井戸遺跡

—— 富津都市計画道路事業 3・3・3 号二間塚大堀線埋蔵文化財調査報告書 ——



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第413集として、千葉県君津都市計画事務所の富津都市計画道路事業3・3・3号二間塚大堀線道路整備事業に伴って実施した富津市鳥井戸遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、室町時代の土坑群が発見され、多くの環状土錘が出土するなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また地域の歴史資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成13年3月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中村好成

凡　　例

- 1 本書は、千葉県君津都市計画事務所による地方道二間塚大堀線の緊急地方道路整備・公共街路整備委託に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県富津市大堀1700-5ほかに所在する鳥井戸遺跡（遺跡コード 226-008）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県君津都市計画事務所の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は、本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、南部調査事務所木更津調査室 主席研究員 土屋治雄が行った。
- 6 発掘調査から報告書の作成に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県君津都市計画事務所、富津市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
第2図 国土地理院発行 「富津」「鹿野山」 1/25,000
第3図 君津市地形図B-4 1/2,500（平成8年修正）
第4図 陸軍参謀本部 迅速測図 「富津村」「桜井村」 1/20,000（明治19年測図）を縮小して使用した。
- 8 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 9 周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和45年撮影のものを使用した。

本文目次

Iはじめ	1
1 調査の概要	1
2 遺跡の位置と環境	2
(1) 地理的環境	2
(2) 周辺遺跡	3
3 調査の方法	3
II検出した遺構と出土遺物	8
1 弥生時代から古墳時代の遺物	8
2 中世の遺構と遺物	9
IIIまとめ	23
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図 遺跡の位置(1/25,000)	2	第8図 土坑群Ⅱ実測図	14
第2図 遺跡周辺地形図(1/2,500)	4	第9図 土坑群Ⅲ実測図	16
第3図 周辺の遺跡	5	第10図 土坑群Ⅳ実測図	17
第4図 トレンチ配置図	7	第11図 土坑群001~004実測図	19
第5図 出土遺物実測図	8	第12図 溝状遺構実測図	20
第6図 本調査範囲遺構配置図	9	第13図 出土遺物実測図	21
第7図 土坑群Ⅰ実測図	12	第14図 出土遺物実測図	22

図版目次

図版1 烏井戸遺跡周辺航空写真	図版5 002号土坑、003号土坑、004号土坑
図版2 遺跡遠景、調査区近景、土坑群Ⅰ	図版6 003~006号土坑、008号溝、009号溝
図版3 本調査区断面、土坑群Ⅱ、土坑群Ⅲ-2	図版7 出土遺物
図版4 土坑群Ⅲ、Ⅳ、土坑群Ⅴ、001号土坑	

I はじめに

1 調査の概要

千葉県君津都市計画事務所は、富津都市計画道路事業3・3・3号二間塚大堀線の建設事業を計画した。二間塚大堀線は、東京湾横断道路、東関東自動車道の骨格道路、上総アカデミアパーク等との接続路線の役割を持っており、慢性化している交通渋滞の緩和及び市民生活の安全確保と沿道地域の活性化を図る目的をもっている。

これに伴って千葉県君津都市計画事務所は、千葉県教育委員会に対し事業予定地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会を出した。

これに対して千葉県教育委員会から、事業地内に遺跡が所在する旨の回答が出された。その後、遺跡の取り扱いについて、千葉県教育委員会と千葉県君津都市計画事務所との間で協議が重ねられ、その結果、発掘調査を行い記録保存の措置を講ずることで協議が整った。調査は、財団法人千葉県文化財センターが実施することとなり、千葉県君津都市計画事務所との委託契約を結び、発掘調査を実施することとなった。

ここに報告する鳥井戸遺跡は、平成9年度と平成11年度に発掘調査を行い、その後、平成12年度に整理作業を行って報告書の刊行に至った。なお、各年度の担当者と作業内容は次のとおりである。

○平成9年度（発掘調査）

期間 平成9年12月1日～平成10年1月30日

調査組織 調査部長 西山 太郎 南部調査事務所長 高田 博

担当 木更津調査室長 小林 清隆

○平成11年度（発掘調査）

期間 平成11年10月18日～平成11年11月19日

調査組織 調査部長 沼沢 豊 南部調査事務所長 高田 博

担当 研究員 鈴木 良征

○平成12年度（整理・報告書刊行）

期間 平成12年7月1日～平成12年8月31日

調査組織 調査部長 沼沢 豊 南部調査事務所長 高田 博

担当 主席研究員 土屋 治雄

2 遺跡の位置と環境

(1) 地理的環境 (第1、2図、図版1)

鳥井戸遺跡は富津市の北東部、君津市との市界近くの富津市大堀1700-5ほかに所在する。君津市豊英を源流とする二級河川小糸川最下流の左岸、標高6m～10mの河岸段丘上に立地する。JR内房線青堀駅から北東に約1.5km、北側を流れる小糸川からの直線距離は最短で約100m、海岸線までの直線距離はおよそ1.2kmであり、東京湾に向かって三角形に突きだしている富津岬の北側の付け根に位置している。

遺跡の所在する富津市は、房総半島の東京湾岸（内房地域）のはば中ほどに位置しており、北側、東側で君津市と、南側は安房郡鋸南町、鴨川市と接しており、西側は東京湾に面している。

富津市の地形は、北東部は小糸川により形成された広大な沖積平野が広がり、南部と東部に房総丘陵が展開している。また、市内には小糸川の他、岩瀬川、染川、湊川によりそれぞれ沖積平野が形成されている。中でも最大の面積をもつのが小糸川沖積平野であり、その北の端に位置するのが鳥井戸遺跡である。周囲は広大な水田、畑作地帯であり、漁業はのりの養殖を中心である。これは対岸の君津市人見（旧人見村）がのり養殖の発祥地であることとも関係が深い。海岸地帯は埋め立てられて京葉工業地帯の南端部となり景観を大きく変えているが、現在も漁港があり富津岬より南では漁業も行われている。



(2) 周辺の遺跡 (第3図)

鳥井戸遺跡(1)は、小糸川(2)の河岸段丘上に立地する中世の遺跡である。

周辺には内裏塚古墳群(3)や飯野古墳群(4)など古墳が多く所在し、小糸川から渓川一帯を支配した須恵国造の墳墓とされている。近年発掘調査例が増えてきており、沖積平野での様相が明らかになってきている。

弥生時代後期から古墳時代後期にかけての集落跡としては、本遺跡の南2.7kmに所在する下飯野地区の神明山遺跡(5)がある。神明山遺跡は旧海岸線から約2.5kmの距離にあり、標高7m~30mの砂丘上及び緩斜面に立地する遺跡であり、90軒の当該期の住居跡が検出されている¹¹。神明山遺跡から北西約2kmの砂丘上の青木地区に亀塚遺跡(6)がある。亀塚遺跡は海岸から約0.7kmの距離にあり、標高約7mの砂丘上に立地する。古墳時代後期の住居跡が28軒検出されている¹²。また、古墳時代後期から奈良・平安時代の遺跡として富吉遺跡(7)がある。小糸川下流左岸の標高約11mの河岸段丘上に立地している。35軒の古墳時代後期の住居跡と奈良・平安時代の掘立柱建物跡16棟、井戸跡1基、幅2.7m深さ2mの溝などが検出されている。鳥井戸遺跡と立地条件が共通する点で興味深い。本遺跡から1.5km南西には、奈良時代の住居跡が89軒検出された下飯野地区の東冠遺跡(8)がある。東冠遺跡も海岸からは800mと非常に海に近い標高約8mの砂丘上に立地する¹³。同じく奈良・平安時代の遺跡として狐塚遺跡(9)がある。狐塚遺跡は本遺跡から2.5km南西にあり標高8.5mの砂丘上に立地する。奈良・平安時代の住居跡が28軒検出されている¹⁴。このように、弥生時代から奈良・平安時代にかけて、海岸から非常に近く標高も10mに満たない沖積平野の砂堤帶を中心に、集落がさかんに営まれていることがわかり、土地利用の様子も明らかになってきている。

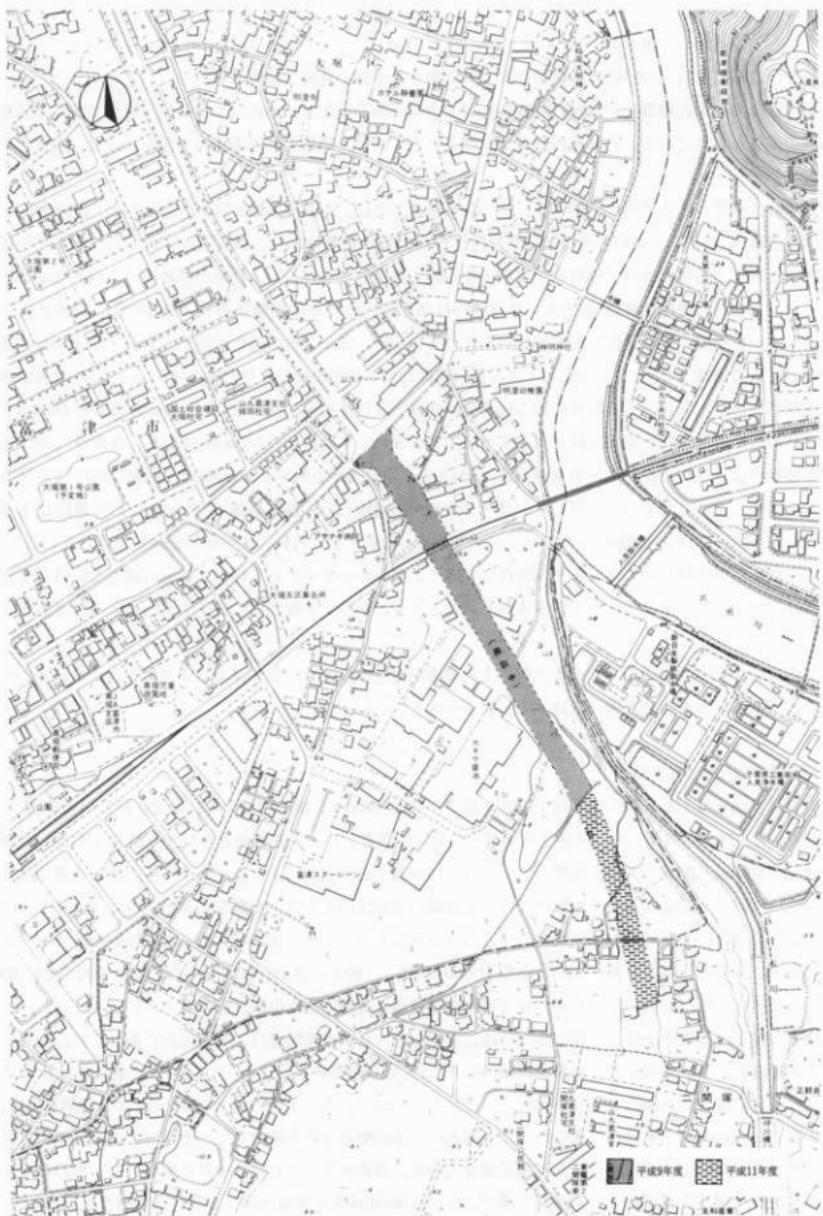
しかしながら中世の様相となると少數の土坑や溝が検出されてはいるが、まだまだ不明なことが多いのが現状である。今後の調査例に期待するところが大きい。

3 調査の方法 (第4図)

調査は2回実施した。第1回目は平成9年度で、長さ約400m、幅約23mのほぼ南北に細長い調査区10,000m²をI区(北半部)と、II区(南半部)に分けて調査した。調査に先立ち公共座標を基準として調査区全体を20m×20mの方形大区画(大グリッド)に分割し北から南に1, 2, 3, …… 西から東にA, B, C…… のように記号をつけた。つまり、北西隅の方形区画を1A、東隣を1Bのように、また1Aの南を2Aのようにすべての区画に番号をつけた。さらに大グリッド内を2m×2mの方形小区画(小グリッド)100個に分割し、北から南に10の位の数字で00,10,20……90と、西から東に1の位の数字で00,01,02,03のように番号をつけ両方の数字をあわせて遺跡内の遺構、遺物の出土位置がわかるようにした。

調査は最初に遺構の所在を確認するため確認調査を行った。確認調査は、調査区内に幅2m長さ10m~20mの確認トレントを26か所(合計面積540m²)を設定し発掘調査を行った。その結果、遺跡には比較的新しい時期に厚さ約70cmの客土が行われていたことがわかり、その下から表土が検出された。遺構確認は、その表土から約30cm下の砂質土層で行った。調査区に醤油醸造会社が隣接しているため、調査は地下水脈に影響が及ばないよう慎重に行った。確認調査の結果、調査区II区において中世に掘られたと思われる土坑群の一部が確認された。そこで遺構の確認された区域480m²を本調査区域と定め、本調査を実施した。

2回目の調査は平成11年度に行った。調査区は平成9年度の南側に隣接する地域であり長さ約108m、



第2図 烏井戸遺跡周辺地形図（1/2,500）



第3図 周辺の遺跡（縮尺1/30,000）

- | | | |
|-----------|----------|----------|
| 1 鳥井戸遺跡 | 2 小糸川 | 3 内裏塚古墳 |
| 4 飯野古墳群 | 5 神明山遺跡 | 6 亀塚遺跡 |
| 7 富吉遺跡 | 8 東冠遺跡 | 9 狐塚遺跡 |
| 10 青木亀塚古墳 | 11 稲荷山古墳 | 12 三条塚古墳 |
| 13 九条塚古墳 | 14 武平塚古墳 | 15 亀塚古墳 |
| 16 西原古墳 | 17 上野塚古墳 | 18 古塚古墳 |

幅約23m、面積5000m²を調査した。遺構の有無を確認するため調査区内に、幅2m、長さ10m～20m、合計面積約780m²の確認トレンチを15か所設定し確認調査を行った。その結果、溝状遺構が検出されたがいずれも近世以降の遺構であることが確認されたため、本調査は行わずに調査を終了した。

基本土層（第4図）

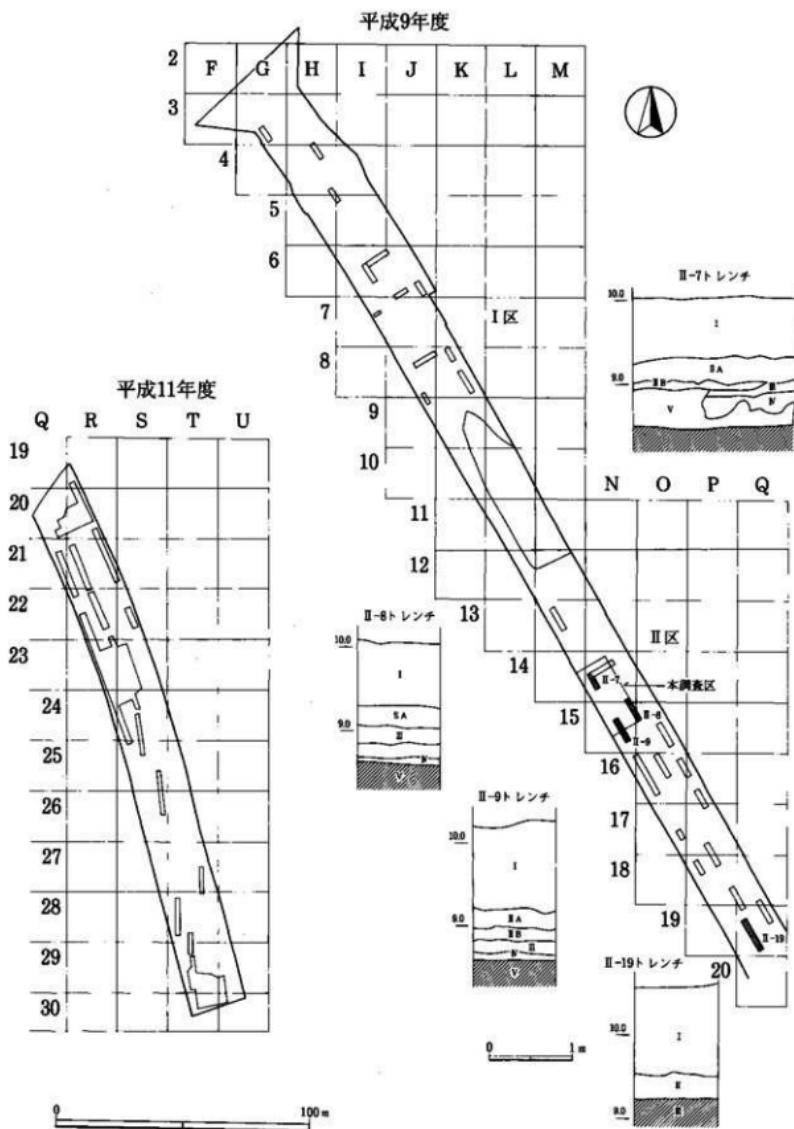
- I層 現表土層であるが、比較的新しい時期に他から土を運んできて土盛りをした層である。
現状で厚さ60cm～80cmである。
- II層－A I層の土が土盛りされる前の表土層であり、黒褐色を呈し砂を多く含んでいる。厚さ20cm～30cmである。
- II層－B 砂層であり、場所によっては確認できない。
- III層 黒褐色土層。II層の下層と考えられる。場所によっては明瞭に分層できない。締まりがあり黒みが強い。厚さ10cm～20cm。
- IV層 砂層。黒色土が混入する砂質土層。厚さ約20cm。
- V層 黒色土層。締まりがあり真黒な色調を呈す。厚さ約50cm。

注) 1 富津市教育委員会 1993 『千葉県富津市神明山遺跡発掘調査報告書』

注) 2 財団法人君津都市文化財センター 1997 『千葉県富津市亀塚遺跡』

注) 3 富津市教育委員会 1993 『千葉県富津市東冠遺跡発掘調査報告書』

注) 4 財団法人君津都市文化財センター 1995 『千葉県富津市狐塚遺跡発掘調査報告書』



第4図 鳥井戸遺跡トレンチ配置図 (1/1,000)

II 検出した遺構と出土遺物

1 弥生時代から古墳時代の遺物（第5図、図版7）

少量化はあるが弥生時代から古墳時代の、器形を特定できる可能性のある土器片を検出した。遺構は確認されていない。

1は、弥生土器（中期後半）の甕の口縁部の破片である。外面は灰褐色、内面は明灰褐色であり、口唇部に指頭押捺が見られ、整形は内外面ともヘラナデしている。内面最上段に輪積み痕を残す。

2は、弥生土器（後期）の甕の縁帯部の破片である。色は淡黄色であり、外面に繩文、肩部に刻みを施す。一部に赤彩が見られ、胎土に砂粒を含む

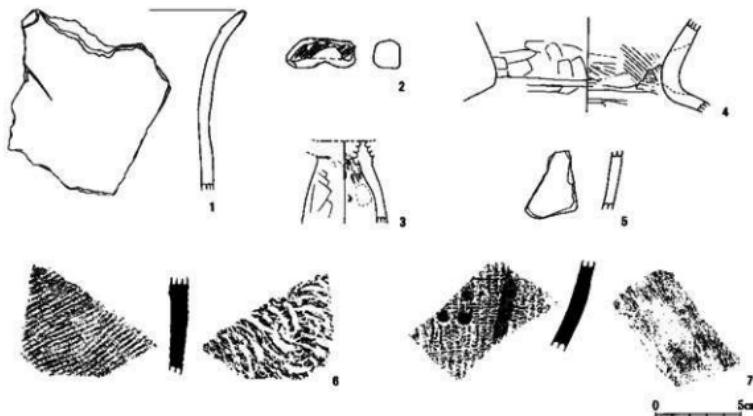
3は、土師器の高壺の脚部の破片である。外面は橙色で、ヘラナデしており、内面は薄橙色でヘラアテし整形している。脚部中央にふくらみが見られる。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

4は、土師器の球胴形の甕の頸部の破片である。色は橙色で、外面にヘラケズリ後ナデ、口縁部内面にハケメ、胴内面にナデで整形している。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

5は、土師器の甕の胴部破片であり、色は外面が暗褐色、内面が黒褐色であり、胎土に砂粒と海綿状骨針を含む。整形は、外面に斜め方向のハケ目、内面はヘラナデしている。

6は、須恵器の甕の胴部破片である。色は灰色で、外面に自然釉が見られ、斜め方向のタタキ目、内面に青海波状のあて具痕が見られる。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

7は、須恵器の甕の胴部破片である。色は灰色で、外面に縦方向のタタキ目がみられ暗オリーブ色の自然釉がかかる。内面は青海波状のあて具痕を消している。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

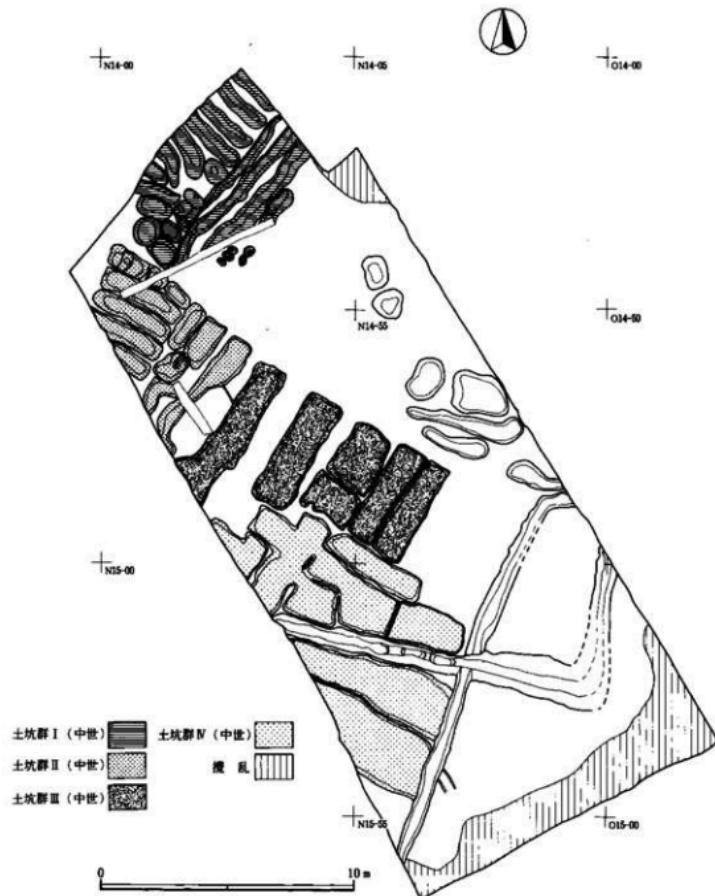


第5図 出土遺物実測図

2 中世の遺構と遺物（第6図）

平成9年度の調査区II区、N14及びN15グリッドを中心とした地区から、その形態や配置関係から4群に分けられる中世の土坑群及び溝群が検出された。土坑総数は42基、溝は4条である。

また、周辺からも群は構成しない土坑7基、溝5条も検出されている。



第6図 鳥井戸遺跡本調査範囲遺構配置図 (1/100)

土坑群 I (第7図、図版2, 3)

土坑21基、溝5条である。北側及び東側が調査区外となるため1号～8号と17～19号は完掘されていない。土坑は平面形が円形に近い形をしているものが13基、長橢円形をしているもの8基である。いずれの土坑、溝からも遺物は出土していない。1号～8号の長橢円形土坑群は、並行した配置関係が認められ方向性が存在する。遺構の長軸は北西～南東を向く。また、それらに直交する配置関係にある17号～20号溝も並行関係が認められる。底面に施設等は検出されていない。硬質な面も認められない。土坑、溝群の南側に土坑群よりかなり小規模の土坑が5基検出された。

土坑 I - 1

現存する長さ2.06m、現存幅36cm、深さ21cmである。平面形は長橢円形で、断面の形は逆台形である。北及び東側は調査区外となるため未調査である。

土坑 I - 2

現存する長さ2.24m、幅57cm、深さ27cmである。平面形は長橢円形で、断面の形は遺存している部分で逆台形であり、底面は平坦である。北側は調査区外となるため未調査である。

土坑 I - 3

現存する長さ2.43m、幅53cm、深さ23cmである。平面形は長橢円形で断面の形は椀形である。北側は調査区外となるため未調査である。

土坑 I - 4

現存する長さ2.60m、幅67cm、深さ25cmである。平面形は長橢円形で断面の形は逆台形に近い。北側は調査区外となるため未調査である。

土坑 I - 5

現存する長さ2.05m、幅74cm、深さ30cmである。平面形は長橢円形で断面の形は逆台形であり底面は平坦である。北側は調査区外となるため未調査である。

土坑 I - 6

現存する長さ1.70m、幅55cm、深さ28cmである。平面形は不整長橢円形で、断面の形は逆台形であり底面は平坦である。北側は調査区外となるため未調査である。

土坑 I - 7

現存する長さ1.00m、幅61cm、深さ29cmである。平面形は橢円形で断面の形は長方形に近く底面は中央部がやや深い。北側は調査区外となるため未調査である。

土坑 I - 8

現存する長さ1.70m、幅50cm、深さ36cmである。平面形は長橢円形で、側面は東側が垂直に、西側がなだらかに立ち上がっている。北側は調査区外となるため未調査である。

土坑 I - 9

長径1.44m、短径76cm、深さ32cmである。平面形は橢円形で、側面は北側が垂直に、南側が斜めに立ち上がっている。

土坑 I - 10

長径1.15m、短径1.06m、深さ35cmである。平面形はほぼ円形で断面の形は逆台形である。

土坑 I - 11

長径1.06m、短径77cm、深さ39cmである。平面形は不整橢円形で、断面の形は腕型に近い。I - 17号溝と重複しており、I - 17号より新しい。

土坑 I - 12

長径92cm、短径45cm、深さ38cmである。平面形は橢円形で、断面の形は逆台形である。側面は北側が垂直に、南側が斜めに立ち上がる。

土坑 I - 13

長径77cm、短径67cm、深さ24cmである。平面形は不整円形で断面の形は逆台形である。I - 14号土坑と重複しており、I - 14号より新しい。

土坑 I - 14

現存する長さ62cm、幅40cm、深さ19cmである。平面形は橢円形で断面の形は逆台形である。I - 13号土坑と重複しており、I - 13号より古い。

土坑 I - 15

長径1.02m、短径62cm、深さ23cmである。平面形は橢円形で、断面の形は逆台形である。I - 10号土坑と重複している。I - 10号土坑より古い。

土坑 I - 16

現存する長径1.08m、短径94cm、深さ26cmである。平面形は長方形で、断面の形は逆台形である。I - 10号土坑と重複している。I - 10号の方が新しい。

溝 I - 17

現存する長さ約5.6m、幅36cm、深さ13cmで、北東方向から南西方向へほぼ直線にのびている。北東側は調査区外のため不明である。断面形は皿形である。I - 11号土坑と重複しており、I - 11号より古い。

溝 I - 18

現存する長さ約6.9m、幅45cm、深さ11cmで、北東方向から南西方向へほぼ直線にのびている。北東側は調査区外のため不明である。断面形は皿形である。

溝 I - 19

現存する長さ約5.0m、幅63cm、深さ21cmで北東方向から南西方向へほぼ直線にのびている。北東側は調査区外のため不明である。断面形は皿形である。I - 20号土坑と重複している。I - 20号より古い。

土坑 I - 20

現存する長さ約1.55m、幅66cm、深さ23cmで平面形が橢円形の土坑である。断面形は皿形である。

土坑 I - 21

長径40cm、短径28cm、深さ6cmである。平面形は円形で、断面の形は逆台形である。

土坑 I - 22

長径47cm、短径31cm、深さ8cmである。平面形は円形で、断面の形は逆台形である。

土坑 I - 23

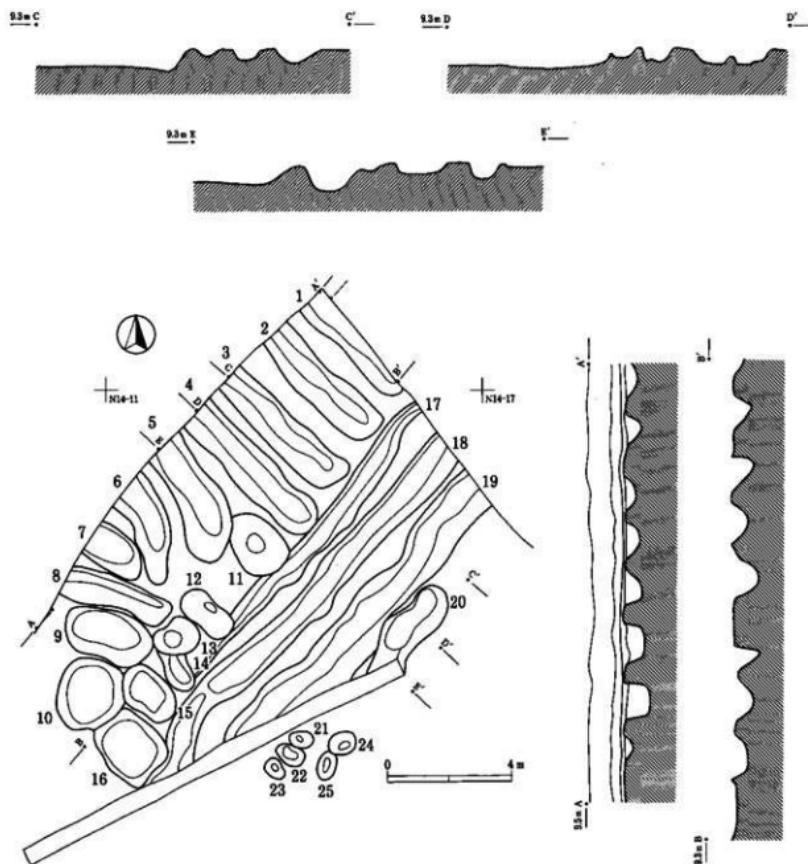
長径36cm、短径24cm、深さ5cmである。平面形は円形で、断面の形は逆台形である。

土坑 I - 24

長径47cm、短径36cm、深さ3cmである。平面形は円形で、断面の形は逆台形である。

土坑 I - 25

長径47cm、短径27cm、深さ1cmである。平面形は椭円形で、断面の形は逆台形である。



第7図 土坑群I実測図

土坑群Ⅱ（第8図、図版3）

平面形が円形あるいは橢円形をした土坑が4基、長方形をしたもののが7基、不整形をしたもののが2基で構成される。1号～7号は並行した配置関係と一定の方向性が認められる。長軸の方向は北北西～南南東を向く。1号～7号とは直交する配置になる8号～12号にも並行した配置関係が認められる。いずれの土坑からも図示できる遺物は出土していない。

土坑Ⅱ-1

長さ1.64m、幅92cm、深さ31cmで、平面形が長方形、断面の形は逆台形に近い。底面にⅡ-13号土坑が掘られている。Ⅱ-13号の方が新しい。

土坑Ⅱ-2

長径85cm、短径69cm、深さ21cmで、平面形が不整形であり、断面の形は皿形である。

土坑Ⅱ-3

長径1.25m、幅55cm、深さ21cmで、平面形が長方形であり、断面の形は皿形である。底面は平坦である。

土坑Ⅱ-4

長径3.47m、幅81cm、深さ10cmで、平面形が長方形であり、断面の形は逆台形である。底面は平坦である。

土坑Ⅱ-5

長さ3.01m、幅75cm、深さ32cmで、平面形が隅丸長方形であり、断面の形は逆台形である。

土坑Ⅱ-6

現存する長さ2.60m、幅76cm、深さ35cmで、平面形が長方形であり、断面の形は逆台形である。西側が調査区外となるため完掘されていない。

土坑Ⅱ-7

現存長2.25m、幅69cm、深さ35cmで、平面形が長方形であり、断面の形は逆台形である。

土坑Ⅱ-8

長さ1.96m、幅68cm、深さ26cmで、平面形が長方形であり、断面の形は逆台形である。

土坑Ⅱ-9

長さ1.84m、幅1.02m、深さ10cmで、平面形が長方形であり、断面の形は皿形である。

土坑Ⅱ-10

長径1.34m、短径98cm、深さ17cmで、平面形が不整形であり、断面の形は逆台形である。北東辺から土坑中心へかけて掘り残しの部分がある。

土坑Ⅱ-11

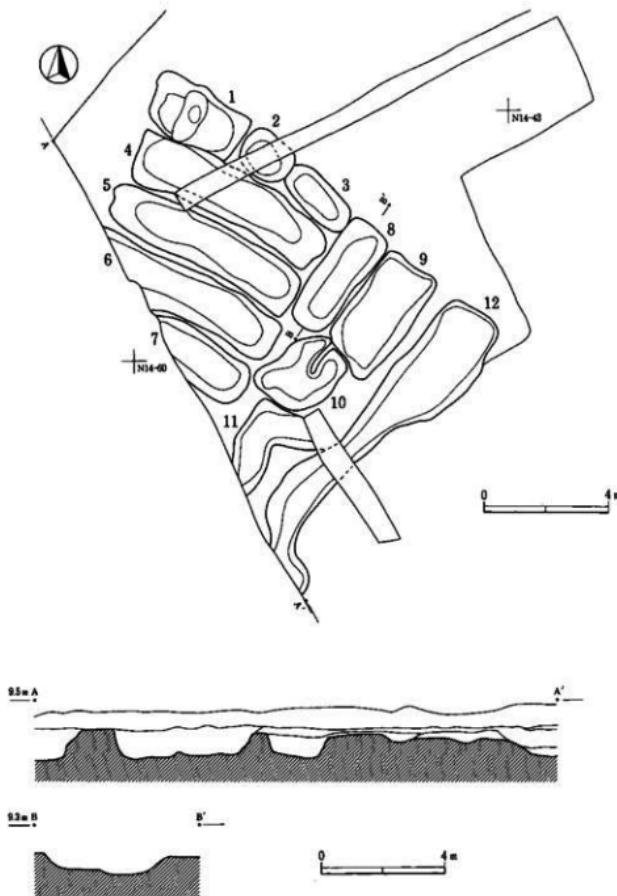
現存長2.06m、短径92cm、深さ31cmで、平面形が矩形であり、断面の形は逆台形である。南北側が調査区外となるため完掘されていない。

土坑Ⅱ-12

現存長5.15m、最大幅1.13m、深さ39cmで、平面形が長方形であり、断面の形は逆台形である。南西側が調査区外となるため完掘されていない。

土坑Ⅱ-13

長径2.02m、短径82cm、深さ3cmで、平面形が長方形であり、断面の形は皿形で堀込みは浅い。
Ⅱ-1号土坑と重複しており、Ⅱ-1号より新しい。



第8図 土坑群Ⅱ実測図

土坑群III (第9図、図版4)

平面形が長方形の土坑6基で構成される。土坑群I、IIに比べ土坑の幅が広く、かなり長方形を意識した企画性が認められる。また同一方向に並ぶ配置関係が認められる。長軸の方向は北北東～南南西を向く。いずれの土坑からも遺物は出土していない。

土坑III-1

現存長5.88m、幅1.49m、深さ36cmで、平面形が長方形であり、断面形は逆台形である。南西側は調査区外となる。土坑は調査区外までのびている。南西側でやや幅が広がる。

土坑III-2

長さ4.63m、幅1.52m、深さ35cmの平面形が長方形の土坑であり、断面形は逆台形である。底面は平坦である。

土坑III-3

長さ2.55m、幅1.83m、深さ23cmの平面形が長方形の土坑で、断面形は逆台形である。南西側でやや幅が広がる。

土坑III-4

長軸2.06m、短軸1.30m、深さ21cmで、平面形が長方形の土坑で断面形は長方形であり、底面は平坦である。南西辺の壁に凹凸が見られる

土坑III-5

長さ4.20m、幅1.09m、深さ36cmの平面形が長方形の土坑で、断面形は逆台形である。

土坑III-6

長さ4.27m、幅1.25m、深さ22cmの平面形が長方形の土坑である。断面形は逆台形である。

土坑群IV (第10図、図版4)

平面形の基本形が長方形の土坑6基である。同一方向に並ぶ並行関係が認められる。長軸の方向は、東南東～西北西を向く。各遺構の間隔が非常に狭く接近しているが重複関係は認められない。

土坑IV-1

長径2.61m、短径1.43m、深さ43cmの平面形が不整長方形の土坑である。断面形は逆台形と思われる。底面は平坦である。

土坑IV-2

長径6.77m、短径93cm、深さ34cmの数基の長方形土坑が組合わさったような平面形をした土坑であるが重複関係は認められない。底面は平坦である。

土坑IV-3

長さ4.22m、幅1.00m、深さ20cmの平面形が隅丸長方形の土坑で、断面形は逆台形である。

土坑IV-4

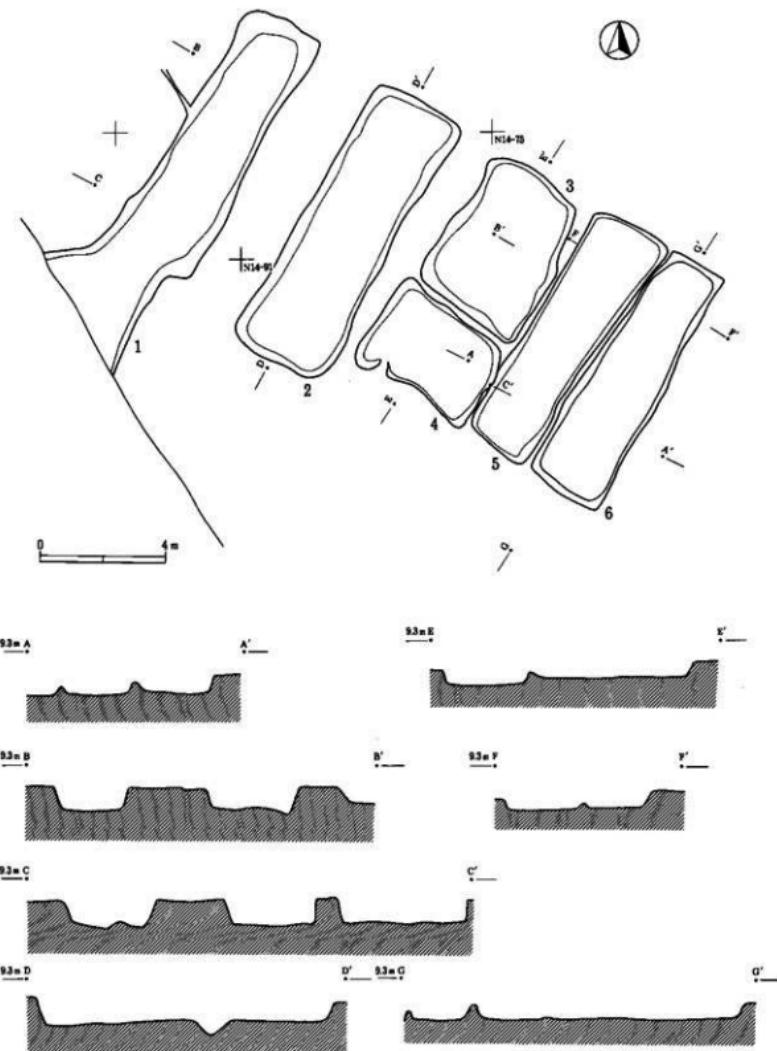
長さ2.92m、幅1.57m、深さ27cmの平面形が台形に近い形の土坑である。断面形は箱形である。

土坑IV-5

長さ6.10m、最大幅2.18m、深さ30cmの平面形が長方形に近い土坑である。断面形は逆台形である。土坑幅が西に向かって細くなっている。東端で009号溝と重複しており009号より古い。

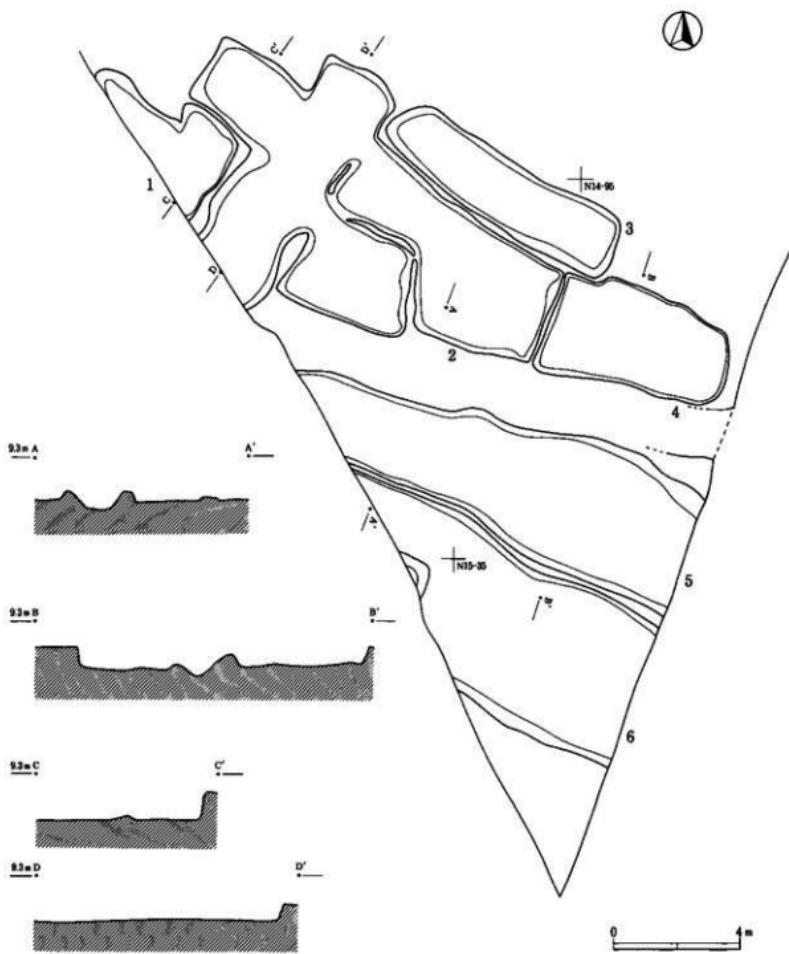
土坑N-6

長さ3.80m、最大幅2.46m、深さ25cmの平面形が長方形の土坑である。009号溝と重複しており、009号より古い。



第9図 土坑群III実測図





第10図 土坑群IV実測図

土坑群以外の遺構（第11、12図、図版4、5）

土坑群の東側から単独で検出された土坑及び溝である。001号～004号の覆土は砂の單一層で分層はできない。遺構内からは遺物は出土しなかった。

001号土坑

長径1.34m、短径93cm、深さ34cmの平面形が隅丸長方形の土坑で、断面形は逆台形に近い。底面は北東側が深い。

002号土坑

長径1.14m、短径1.07m、深さ35cmの平面形が不整円形の土坑で、断面形は逆台形である。底面は北側が深い。

003号土坑

長径1.76m、短径1.18m、深さ22cmの平面形が不整橢円形の土坑で、断面形は逆台形であり底面は平坦である。

004号土坑

長径2.31m、短径1.53m、深さ28cmの平面形が不整隅丸長方形の土坑で、断面形は皿形であり底面はやや凹凸がある。001号～003号に比べ底面がやや硬質である。

005号溝

全長4.85m、最大幅77cm、深さ29cmの溝状遺構である。東端で北東方向に曲がり、幅は西に向かって細くなっている。断面形は椀型である。

006号溝

長さ2.69m、最大幅78cm、深さ26cmの溝状遺構である。断面形は逆台形である。005号の南側に隣接し、005号と並行している。

007号溝

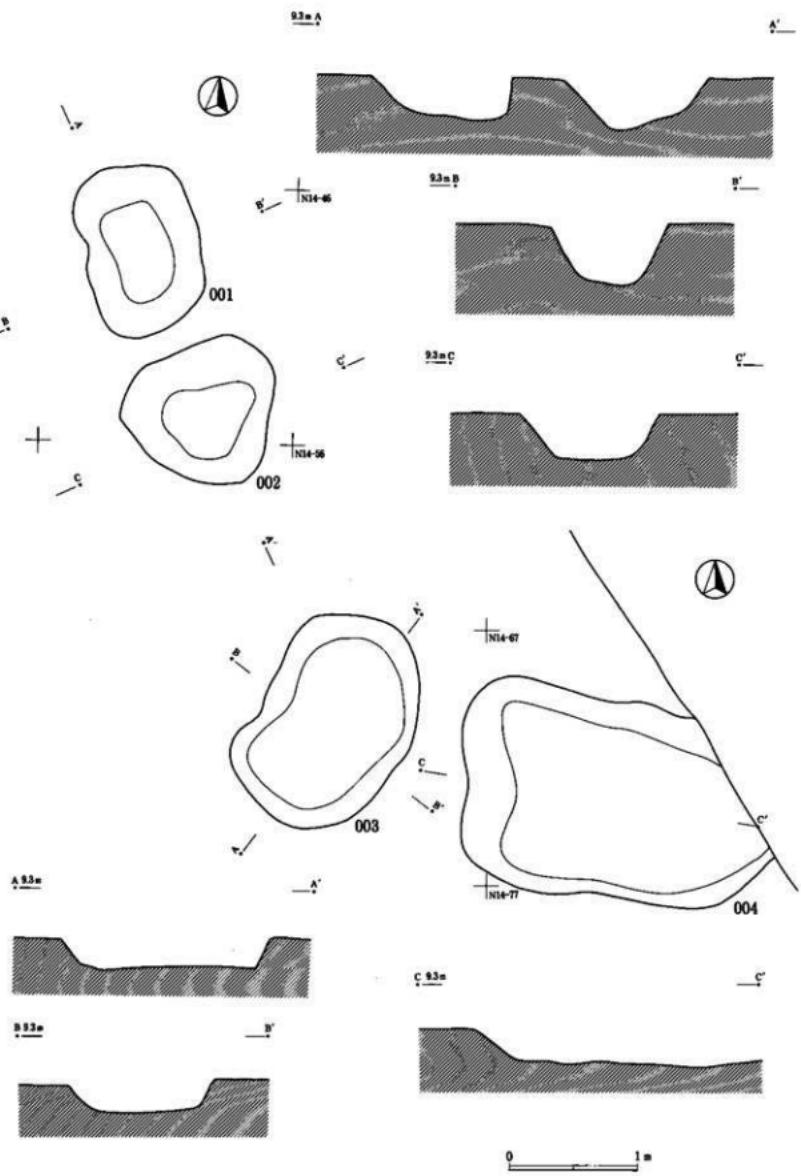
現存する長さ2.26m、最大幅90cm、深さ20cmの溝状遺構である。断面は皿形である。

008号溝

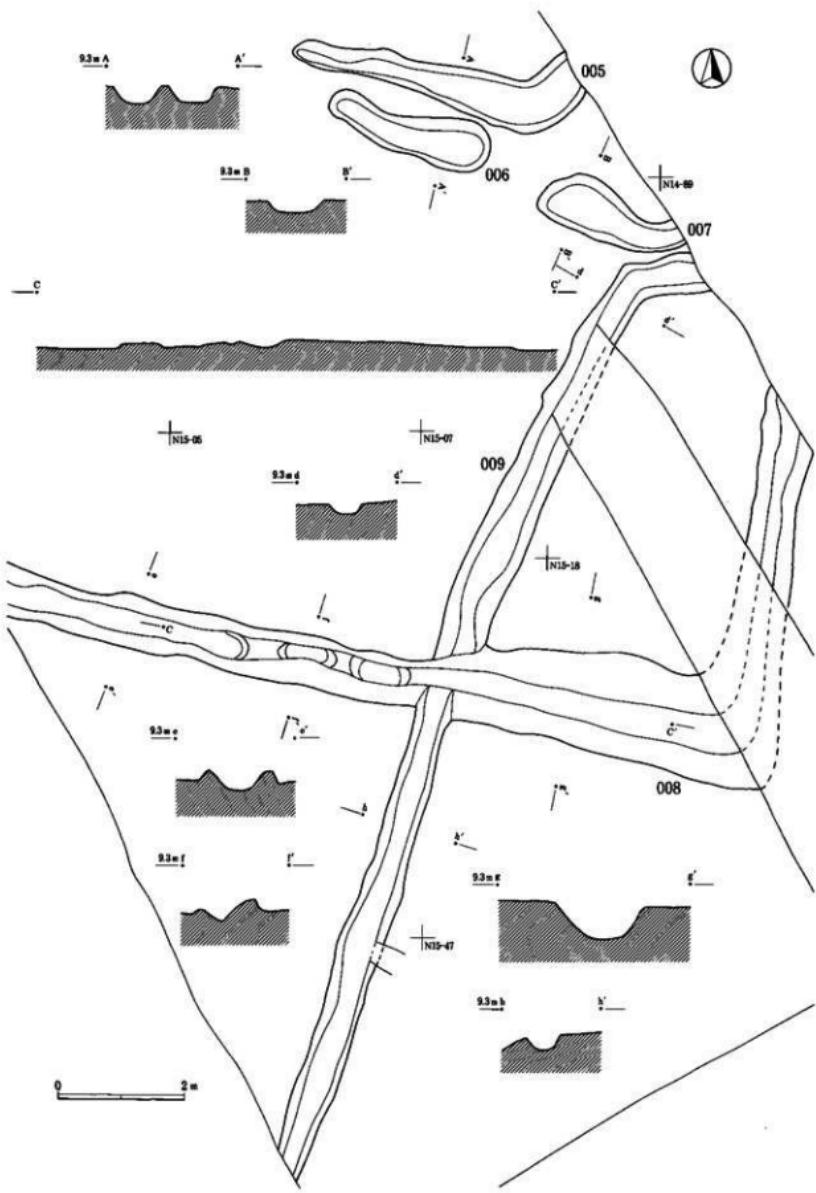
現存する全長16.95m、幅は78cm～1.46m、深さ14cm～51cmの溝状遺構である。ほぼ東西方向に掘られており、調査区東端でほぼ直角に北方向に曲がっている。断面形は椀型である。北端と西端は調査区外となるため未調査である。009号溝と重複しており、009号より新しい。

009号溝

現存する全長25m、幅55cm、深さ29cmの溝状遺構である。溝の方向は北北東から南南西である。北端部分で東方向に緩やかに曲がっている。断面形は皿形である。北東端と南西端は調査区外となるため未調査である。008号溝と重複しており、008号より古い。



第11図 001~004土坑実測図



第12図 溝状遺構実測図

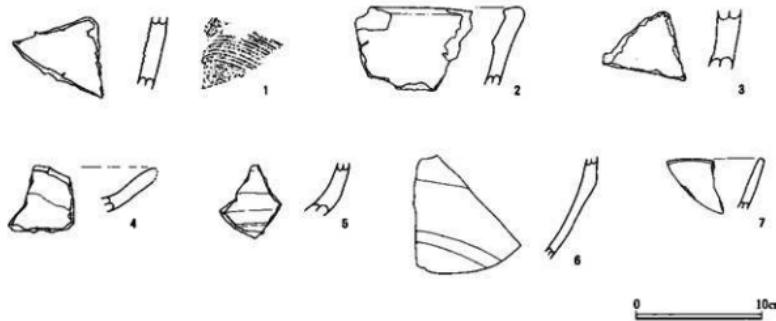
出土遺物（第13、14図、図版7）

陶磁器

- 1は、N14-75出土の瀬戸・美濃焼すり鉢胴部の破片である。
- 2は、II-13トレンチ出土の瀬戸・美濃焼鉄釉すり鉢の口縁部の破片である。15世紀後葉と思われる。
- 3は、II-7トレンチ出土の瀬戸・美濃焼の壺の胴部の破片である。12~13世紀のものと思われる。
- 4は、瀬戸焼の縁釉小皿の口縁部の破片である。15世紀後半のものと思われる。
- 5は、志野焼の丸皿の胴部下半部の破片である。17世紀初頭と思われる。
- 6は、N14-72グリッド出土の瀬戸・美濃焼の天目茶碗の胴部下半部の破片である。
- 7は、N14-32出土の瀬戸・美濃焼縁釉小皿の口縁部の破片である。16世紀初頭頃のものと思われる。

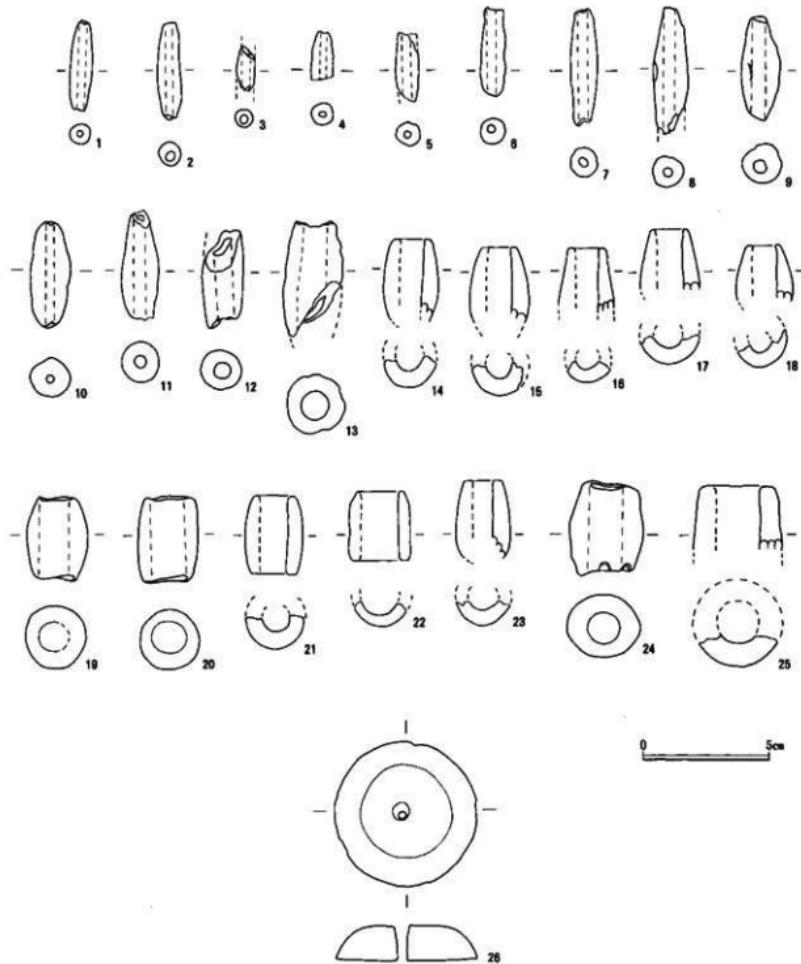
土製品

1~25は素焼き製の管状土錘である。1~13は長さが最大径の3倍以上であり、14~25は長さが最大径の1.5倍以下である。1、2は完形で、1は長さ3.65cm、最大径は0.9cm、重量は26.5gである。2は、長さ3.9cm最大径0.9cm、重量は2.92gである。7~11は完形で、7は長さ4.2cm最大径1.1cm、重量4.6g、8は5.15cm、最大径1.4cm、重量6.79g、9は長さ4.1cm、最大径1.6cm、重量6.6g、10は長さ4.2cm、最大径1.6cm、重量8.0g。11は長さ4.4cm、最大径1.5cm、重量7.9g、19は完形で長さ3.3cm、最大径2.5cm、重量15.5g、20は完形で、長さ3.4cm、最大径2.3cm、重量17.6g、24は完形で長さ3.7cm、最大径2.9cm、重量22.6gである。26は土製紡錘車で、直径5.8cm、厚さ1.4cmで色は濃い灰色で瓦質状である。



第13図 出土遺物実測図

土製品（土器・筋すい車）



第14図 出土遺物実測図 (1/ 2)

III まとめ

1 検出された土坑群について

約30m×14m程度の狭い範囲に密集して検出された。

土坑総数は51基、溝状遺構9条を数える。

周囲から中世期の遺物が出土していることから、遺構の時代は中世期にさかのぼるであろう。

土坑内から全く遺物が出土しないことと、他に全く類例がないこともあり、遺構の性格がつかめない。

土坑群の特色をまとめてみると次のようになる。

- 1 ほとんど同じ面から検出されている
- 2 形態を同じくする土坑が群をなしている 円形 楕円形 長方形
- 3 一定の方向性を持って配列されている
- 4 群ごと形態ごとに方向を異にしている
- 5 土坑が密集しているにもかかわらず、ほとんど重複関係が見られない
- 6 覆土は砂質土で分層できない
- 7 遺跡内でも場所が限定される可能性がある

これらから導き出されることは、

- 1 土坑群はほとんどほぼ同時期に存在していた。
- 2 中世のある時期に一気に埋まってしまった可能性がある。

しかしながら遺構の性格までは明らかになってこない。

誤解を恐れずに言うとすれば、段丘状を利用した畑作など耕作に関係した遺構という性格も考えられるのではないか。

今後、周辺での発掘調査例が増え、周辺の土地利用の状況が明らかになり、また同様の土坑群の検出例が増える中で、性格が明らかになっていくことを願ってやまない。

2 出土土錘について

鳥井戸遺跡では形態的に5種類に分類できる土錘が出土している。

考古学上では、これらの土錘は漁業に使用されたものであろうとされている以外、不明な点ばかりの多い遺物である。

富津市金谷在住で、昭和27年以来漁網製造・販売を営む竹之内氏に御教示を得ることができたので紹介してみたい。

「沈子（土錘）は、網を使用する漁業では、常に網、浮子（あばと呼ぶ）沈子（いわと呼ぶ）のセットで機能する。定置網の場合、網の上方に浮子を、下方に沈子をつけ魚の通過する海中に固定させて魚を取る。土製の沈子（土錘）は、第2次大戦後間もなくまで広く使用されていたが、現在ではキスの定置網で使用するのみとなり、素材が鉛、プラスチックに変わってしまった」出土した土錘（沈子）を見てもらった結果「1、2はカレイ、キス網用、13は伊勢えび、サザエ網用、20は伊勢エビ網用、24はイナダ、キス、スズキ網用である」という御教示を得た。「比較的波が静かであると思われる東京湾でも、波の荒いと思われる外房でも使用する沈子は同じである」ということであった。

また、「漁網の素材は、わら縄→麻→木綿→ナイロンと変化してきたが、沈子(土錘)は変わらない」そうである。「漁網素材の変化に対応させるのは浮子の方で行う」とのことであった。ちなみに「浮子の素材は長く木製であったが、急速にプラスチックへと変わっている」ということである。

民俗資料によると、キスの木綿製の網の場合浮子(桐製)を71個、沈子(素焼き製)を227個使用することが知られている¹¹。

沈子(土錘)は、弥生時代以降形態の変化がきわめて少ない遺物である。そのため使用目的が特定しやすいという特徴を持っている。本遺跡での土錘の出土点数は少ないが、網漁業を行って生活していたことが明らかになったと思われる。今後の資料の増加により、土錘から漁業面での生活が明らかになっていくことを願ってやまない。

注) 1 「重要有形民俗文化財 房総半島の漁労用具 第2集」 平成2年 千葉県文化財保護協会



図版2



遺跡遠景



調査区近景（東から）



土坑群 I



土坑群Ⅰ
土層断面（南東から）



土坑群Ⅱ（北西から）



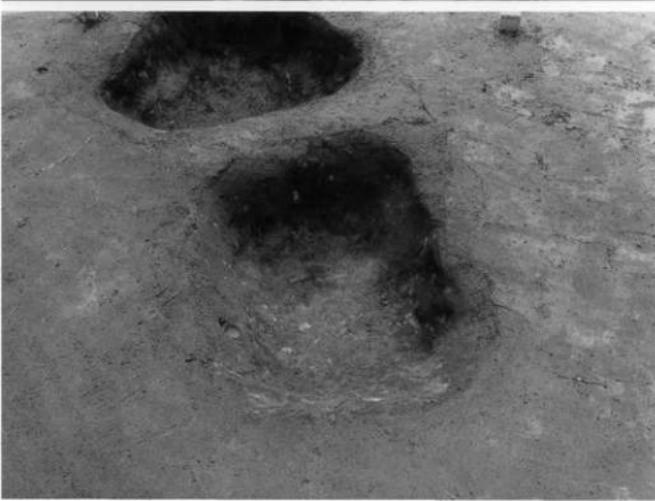
土坑群Ⅲ-2（北東から）



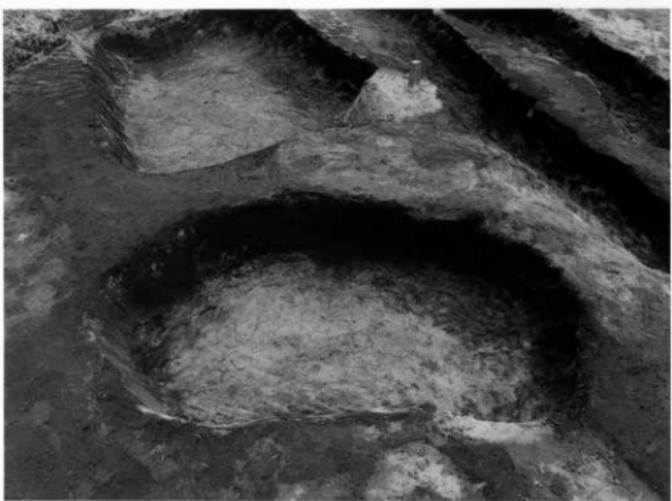
土坑群Ⅲ・Ⅳ（西から）



土坑群Ⅳ（全景）



001土坑（北から）





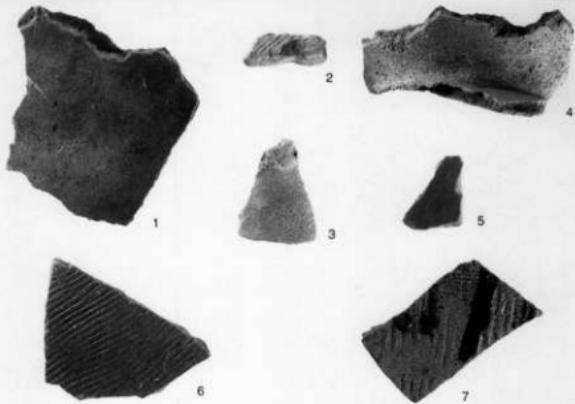
003・004・005・006 土坑



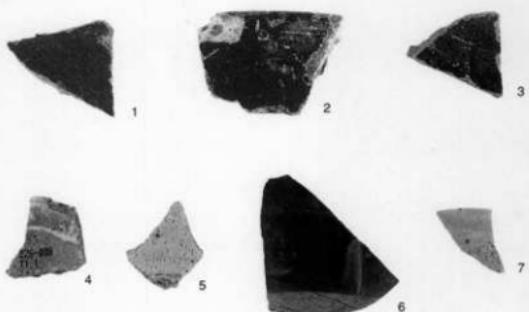
008 溝状遺構（東から）



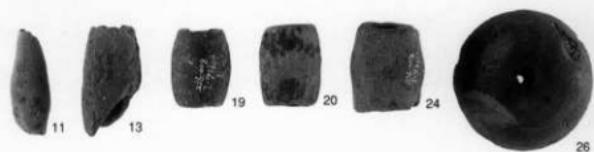
009 溝状遺構



弥生土器・土師器・須恵器



陶磁器



土製品

報告書抄録

ふりがな	ふっしとりいどいせき							
書名	富津市鳥井戸遺跡							
副書名	富津都市計画道路事業3・3・3号二間塚大堀線埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第413集							
編著者名	土屋治雄							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811							
発行年月日	西暦2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
鳥井戸	千葉県富津市大堀 1700-5ほか	12226	008	35° 19' 45"	139° 52' 02"	19971201～ 19980130 19991018～ 19991119	15,000	地方道二間 塚大堀線整 備に伴う埋 蔵文化財調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
鳥井戸遺跡	包藏地	弥生時代		弥生土器（中期）				
	包藏地	古墳時代		土笛器、須恵器				
		中世	土坑群4か所 溝状遺構	51基 9条	土師質土器、陶器 環状土器、紡錘車			

千葉県文化財センター調査報告第413集

富津市鳥井戸遺跡

—富津都市計画道路事業3・3・3号二間塚大堀線埋蔵文化財調査報告書—

平成13年3月31日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター
発 行 千葉県君津都市計画事務所
千葉県木更津市潮見7-3-9
財団法人 千葉県文化財センター
千葉県四街道市鹿渡809-2
印 刷 大和美術印刷株式会社
千葉県木更津市潮浜2-1-10